

健康登山61:自然歩道31 (加太駅～関駅)

|        |   |                          |  |
|--------|---|--------------------------|--|
| コース    | 京都駅 加太駅 2.4km/44 虻谷川分岐 2.2km/66 牛谷川の峠 1.6km/26 中津川合流点 1.6km/25 国道1号線 0.8m/23 枝尾根 0.5/12 登山口 1.0km/31 筆捨山 2.2km/63 観音山下部 2.4km/34 関駅 京都駅 |                          |  |
| 水平距離   | 14.7km  | 断面図<br>縦軸：高度m<br>横軸：距離km |  |
| 水平換算距離 | 16.2km  |                          |  |
| 累計高低差  | 登り711m、下り785m   |                          |  |
| 標準歩行時間 | 5:24  |                          |  |
| 実績歩行時間 | 5:54  |                          |  |



山行報告

|     |   |    |       |     |    |
|-----|---|----|-------|-----|----|
| 山行日 | 2010・12・2(木)  | 天候 | 晴のち曇り | 参加者 | 6名 |
| 行動  | 京都駅7:41 加太駅9:21 虻谷川分岐点9:56 牛谷川の峠11:26 中津川合流点(昼食)11:54~12:26 国道1号線12:46 筆捨山登山口12:55 枝尾根上部13:12 登山口13:37 筆捨山14:14 観音山下部15:34 関駅16:17~16:51 京都駅18:27 |    |       |     |    |

記録

先月は加太駅から錫杖岳に登ったが、今回は東海自然歩道歩きである。加太駅から林道板屋線を虻谷川まで歩き、前回の続きとなる東海自然歩道に合流した。虻谷川沿いの林道を15分ほど登ると道標があり、橋を渡ってここから尾根道に入る。高度230mから最高点の403mを越えて牛谷川の峠まで100m下るだけだが、途中にいくつもの急なアップダウンがあり自然歩道としてはかなり厳しい山越えである。自然歩道は牛谷川の峠から北へ下り中津川の合流点から川沿い道を国道1号線へ向っている。中津川の合流点が諸戸山林事務所ここで昼食をした。東海自然歩道の道標にバンドウ山と表示されているのはこの辺りの筈である。地元の方もこの辺り一帯をバンドウ山というとのことだった。帰宅後ネットで調べると山林事務所の北1km地点にある451mのピークがバンドウ山で、鈴鹿の山ハイキング100選に楽なコースとして紹介されているそうだが、実際は危険で立ち入れないと書かれている。頼りの送電線巡視路も流されたり土砂で埋まったりして危険な状態とのこと。そのためか新しい送電線の鉄塔工事が盛んに行われていた。国道1号線を越え、関町沓掛までが東海自然歩道で、ここから観音山歩道を通って関駅へ向かった。観音山歩道は東海自然歩道のサブコースでもあり途中に筆捨山もある。この歩道の入口付近が関町沓掛フィールドという森林公園になっている。その枝尾根に入り露岩帯を登ったが引き返して登り直したので40分のロスをしたが結構楽しめた。後でGPS軌跡を調べると引き返す必要はなかったようである。筆捨山で集合写真を撮り、整備の行き届いた散策道を観音山下部まで下った。関駅へ向かう途中、昔の宿場町関の面影を残す街並みを見学させてもらった。



自然歩道（加太駅～沓掛～関駅）



①加太駅を出発  
09:21



②虻谷川分岐点  
09:56



③急坂を登る  
10:43



④牛谷川の峠  
11:26



⑤中津川合流点  
諸戸山林事務所  
12:22



⑥国道1号線の  
沓掛歩道橋から  
12:46



⑦筆捨山登山口  
12:54



⑧筆捨山にて  
14:13



⑨展望台から  
亀山方面  
15:18



⑩関宿散策  
15:49

名所・旧跡ミニガイド（自然歩道：加太駅～関沓掛～筆捨山～関駅）

参考資料 ホームページ他より

蛇谷川/牛谷川：「加太川」の支流。東海自然歩道から、最寄り交通への分岐点。

JR加太駅から東海自然歩道への道があります。東海自然歩道と蛇谷川及び牛谷川が近接する地点に、自然歩道の分岐があり、加太駅を起点ゴールにしたり、加太駅へのエスケープ道の判断地点です。

【加太川】

古くからある加太郷の地名から川名が付けられた。源は雀頭(山)「鈴鹿川」の支流。二級河川。流路延長 13.5 k m。

【鈴鹿川】川名は鈴鹿山より由来する。

蛇行が多く「八十瀬」と喩えられ伊勢に行くのに幾度も川を渡ったという。三子山と加太谷の二方から流れ、四日市市南部で伊勢湾に注ぐ。

流路延長 38 k m。加太川（安楽川、内部川、他）の本流。一級河川。

諸戸山林事務所：諸戸山でなく「山林王」諸戸家の諸戸グループの山林事務所です。この付近一帯は諸戸家の持ち山です。近くに諸戸翁の顕彰碑があります。

諸戸清六翁：1846年三重県桑名加路戸新田の大庄屋諸戸家の長男として生まれた。

父は塩問屋の商売に失敗し身代を潰して一千両を超す莫大な借金があったといわれる。当時交通の良い桑名でコメの買い付けを始め、昼夜を問はず働き、僅か3年足らずで全ての借金を返した。信条は『時は金なり』。

明治維新を商機として、事業を拡大、西南戦争における兵糧調達での実績で多くの政府要人の信頼を得て明治11年(1878)大蔵省の米買付方となった。1883年から土地を買い始め、渋谷から世田谷まで他人の土地を踏まずに行ったという。

荒れた山林を購入植林商売だけでなく、治水のため荒れた山林を購入し植林を行ったり、水道施設を造り自家用水道を町内55か所に給水栓を設置無料で開放した。

全国で7番目に建設された水道施設は大正13年に町に寄贈され昭和4年まで使用された。

幼名は「民治郎」で、父の名の「清九郎」をひっくり返し「清郎九」＝「清六」と変え、このとき「立志の誓い」をしたという。

明治39年(1906)61歳で死去。

二代目清六：初代清六の四男清吾(1888生)が二代目を継ぎ諸戸本家(東諸戸家)

諸戸林産、造林など。二男清太は諸戸宗家(諸戸西家)と諸戸林業などの各産業を中心に諸戸グループを形成した。

諸戸両家を合わせると、諸戸一族が所有する山林は一万町歩と言われます。  
二代目清六の邸宅「六華苑」 入苑料 300 円（桑名市）  
初代清六の邸宅「諸戸氏庭園」入園料 500 円（桑名市）

バンドウ(坂東)：東海自然歩道の道標にしばしばバンドウ山への案内表示があります。  
このバンドウ山の位置が解らず、東海自然歩道の板屋から牛谷川の分岐に至る峠のピークをバンドウ山と信じるハイカーが多いそうです。

本来のバンドウ山は諸戸林業事務所の北にある P 451 がバンドウ山(北休石)です。

登山口は諸戸林業事務所西側から尾根道を登ります。他に下流の送電線巡視路案内版 111 から途中で合流出来ます。(巡視路ルート)

下山は「長峰(標高 500m)」を往復後、諸戸林道を下り中津川北端の林道から諸戸林業事務所まで戻れます。

中津川北端から対岸の南休石 P 446m を登り、東の尾根を下り諸戸林業事務所前の「山の神」に周回することも出来ます。

「長峰」は鈴鹿高畑山稜線の南に対峙する山稜で高畑山から周回コースとして使われています。

沓掛宿 : 坂下宿に隣接する昔の東海道の小さな宿場、街道筋の風情を残しています。

筆捨山 : 狩野元信がこの山を描こうとしたが、気候が頻繁に変わり、奇岩の岩肌が多く、移り行く自然の変化を描ききれず筆を捨てたという故事よる。  
(元名は岩根山 285m。)

狩野元信(1476~1559)。室町時代の絵師狩野正信の子で京都生まれ。狩野派の基礎を築いた。

歌川広重が東海道五十三次の 48 番目の宿場「坂下宿」を題材に「筆捨山」を描き込んでいます。江戸から来た方向のため、左側に山が描かれています。  
筆捨山~羽黒山(290.8m)の周回登山コースがあります。

「羽黒山」は低山ながら巨岩のスリリングな岩場のある山です。  
(巻き道もあるそうです)

この「羽黒山と岩群」が、記念切手にもなっています。

観音山 : 標高 224m。東北の山腹に観音堂を建立し十一面観音を安置したので「観音山」と呼ばれるようになった。

観音寺山公園から遊歩道もあります。公園はサクラの名所になっています。

関富士 : 四等三角点、標高 242.8m。山容から関富士と呼ばれています。展望は無い。

正法寺山荘跡 : 亀山城主「関盛貞」が創建した寺、戦国武将の砦を兼ねた山荘跡として重要とされ遺構( )がよく残っている。(1504~21)

赤坂頓宮跡 : 斎王が伊勢に向かう折の鈴鹿(赤坂)頓宮。関の町が一望できる山の中腹にある。今は整備され憩いの公園になっている。斎王群行図の石板があります。

関宿 : 三関の一つ鈴鹿の関から名付けられた。東海道五十三次の 47 番目の宿場。大名行列や伊勢参りの旅人で賑わった。

三関とは、畿内を防御するために特に重視されたところで、東山道**不破関**、(本州の内陸部を東西に横断する幹線道路。近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、武蔵、出羽、陸奥など)不破の関は、壬申の乱の激戦地。  
東海道**鈴鹿関**、北陸道**愛発関**(あらかのせき)敦賀市南部。  
平安時代は愛発関に代わり**逢坂関**が三関になった。

関の山 : 「関の山」の語源となった関夏祭り(7/下)の山車に関係する。  
意味は、一生懸命やって可能な限りのことである。  
山車を互いに絢爛豪華に競い合い、これ以上贅沢な山は作れない。  
最盛期には16基あったが、現在は4基。  
町内の街道を軒先いっぱい塞いで通りこれ以上は通れない様子。

羽黒権現神社 : 源義経の家臣、佐藤継信、忠信の兄弟は平家追討のため、義経に従いこの地を通ったが、その時家来の一人が病気になったため、この地に留まる。その家来は、故郷の羽黒大権現に祈願したところ、祈願が成就した。たいへん喜びそこで、本国である出羽国の羽黒大権現を勧請しこの山(羽黒山)に祀った。  
羽黒山の登山はこの神社から登れます。